

---

# 創造王の遊び場

辺 鋭一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

創造王の遊び場

### 【Nコード】

N1988Z

### 【作者名】

辺 鋭一

### 【あらすじ】

ある日、トラックに轢かれそうになっている子どもの身代わりになり死んでしまった男が、神に興味をもたれ、転生するお話。

プロットも構想もろくに練っていない行き当たりばったりなお話なので、基本的に不定期です。それでも良い方は、どうぞご覧下さい。

## プロローグ 1 (前書き)

初めての連載小説です。

行き当たりばったりですが、どうか温かい目でご覧ください。

プロローグが少々長くなったので三つに分けました。

## プロローグ 1

……どこだここは？

なんだかわからないが、今自分は和室にいる。

それも茶室のような狭いながらも趣のあるような所ではなく、大奥などの時代劇に出てきそうなとても広い畳敷きの部屋だ。

部屋の真ん中に寝転がっていた体を起こし周りを見てみるが、見えるのは木目のきれいな天井と、自分を取り囲む穴などどこにも空いていないまっさらな障子と、床に敷かれた新品同様の畳だけだ。

畳二百畳分ぐらいありそうな広い部屋には和室にありがちな掛け軸や壺などの飾りは一切なく、それどころか障子以外の壁は全くない。

障子を開けて外に出ようとするが、そもそも開けられるようになっていないようだ。

何しろ同じレールの上にすべての障子がぴっちりハマっているため、取り外すために障子を持ったための隙間すら作れない。

仕方なくぶち破ろうとして体当たりや蹴りなどを放つも、ぶち破るどころか穴をあけることもできなかった。

触る分には普通の木と紙の感触しかしないし、紙の部分を少し押してみても普通の障子紙のように向こう側にへこむが、そこからはいくら力を入れてもびくともしない。

同じ場所で五分ほど障子と格闘した後、障子に沿って歩きながら観察し、一周してみたがどこも同じようで脱出は不可能だった。

体力的にはともかく精神的には参ってきていたので、さっきまで自分が寝ていた部屋を中心まで戻りドカッとすわり腕を組んで考える。

……落ち着け。　まずはどうしてこんなところにいるのか考えるんだ。

まずここに来るまで私は何をしていた？

そう考え思い出すのは、朝、大学に向かう途中の道の風景だ。

今日の講義の教室の場所はどこだったかなと考えながら校舎に向かっていているとき、ふと視界の隅に何かがあった。

何かと思い見てみると、小学校低学年ぐらいの子どもが自分の横を走り抜けていったようだ。

自分にはもうない元気な無邪気さに微笑ましい気持ちになると、子どもはランドセルを揺らしながらそのまま元気に走っている、かなり急いでいたのであろう、十字路を渡ろうと車道へと飛び出していった。

……すぐ近くに来ているトラックに気が付く様子もなく。

その道は以前からドライバーからの見通しが悪く、飛び出してく  
るまで誰がいるかわからず、信号も設置されていないため事故が多  
発し、何人もなくなっている危険地帯であり、地元住人の嘆願によ  
り、鏡や信号設置の計画が立てられていると聞いたことがあった。

現に自分も、道の端にひっそりと置かれている花束を何度か目に  
したことがある。

目の前で道路を駆け抜け始めている子どもと、迫りくるトラック  
を見て、そして以前見た花束が大型車の通った風圧で揺らされてい  
る光景を思い出し、

気が付くと全速力で走っていた。

トラックが子どもにどんどん近付いていくのを見ながら自分は走  
り続けた。

インドア派で体もあまり鍛えていなかったために動きが鈍い自身  
の体を恨めしく思いながら、それでも体を前へ押し進めていく。

それぞれの位置関係から、このままだと子どものもとへたどり着  
いたすぐ後にトラックにぶつかるだろうと計算し、それでも走らな  
いことを選択肢から除外し、駆けてゆく。

そして大きな二車線道路の手前側、ちょうどその真ん中で子どもに追いつき、右から迫るトラックの姿を感じながら子どもの背負ったランドセルの上部にある持ち手をつかみ、思い切り引っ張るようにして後ろに放り投げる。

振り向くようにしてみた子どもの顔は驚き一色で、空中にいることも相まってとても滑稽に見えた。

そして、自分の顔に微笑みを浮かべながら、しりもちをつくように安全なところへと落ちていく子どもの、

着地の直前にトラックのぶつかる衝撃を感じ、自分は意識を失った。

あらかたのことを思い出し、

……よく生きてたな、私は。

とか考えながら、自分の体を確かめるがどこにも傷はなく、先ほどまで動き回ったり障子相手に格闘していたことを今更ながら思い出し、疑問を強くする。

……いくらなんでも無傷はないな。まさか夢落ちか？

ここは見た感じ病院ではないし、ではどこなのだろうと考えながら、ふと、ここに来てから一言も発していないことに気が付き、どの調子を確かめようと少しの茶目っ気とともに声を発した。

「ここはだれ？ 私はどー？」

「逆じゃろ、それは」

いきなり聞こえてきたしわがれ声に驚き、振り返りながら立ち上がり身構えると、そこには禿げ頭でもじゃもじゃの白いひげを生やし、藍色の着古したような甚平を着た爺さんが立っていた。

驚きながらも、疑問に思ったことを尋ねる。

「あなたは誰だ？ というかいつからそこにいた？ それ以前にどうやってここに入ってきた？」

「ずいぶん質問が多いのう。質問は一度に一つずつと教わらなかったのかの？」

「それは失礼した。では、今のこの状況を説明していただけるとありがたい。いきなりこんなところに連れてこられ、少々混乱している」

「先ほどからの行動とここにきての第一声から鑑みるに、あまり混乱しておるようには思えんのじゃが……、儂や、おぬしが何か話したら出てこようと思っと思ったんじゃが、案外のんきじゃのう、おぬし」



「そんなことはない、混乱した時こそ冷静に行動しないと痛い目を見ると経験から学んでいるのでね。それに、緊迫しているときほど先ほどのような冗句が冷静さを生み、解決策を与えてくれるものだとも思っている」

「一步間違えれば何も考えて無いバカじゃな。どうしても良いが、その無駄に偉そうな話し方どうにかならんのか？ わし一応おぬしより長生きしとるんじゃないが」

「それはできない。私は相手が目上だろうが目下だろうが万人に対して同じ姿勢を貫く事になっている。個性として受け止めたまえ」

「下手をしなくても周りが敵だらけになると思っんじゃないが」

「そんなことよりご老体、まだ私の質問に答えていないぞ。早く私の現状を説明したまえ」

「おお、そうじゃったの。はっきりいうがの、おぬし、死んだぞ」

……は？

## プロローグ 2 (前書き)

プロローグ 2 / 3です。

では、さようなら。

## プロローグ 2

「……すまないご老体、今少々聞き取りづらくてね。もう一度言ってはくれないか？」

「じゃから死んだんじゃて、おぬし」

「……ご老体」

「何じゃ？」

「自覚は無いと思うので控えめに言わせてもらうが、あんた頭おかしいぞ、ボケが始まったのではないか？ よければ良い医者を紹介するぞ？」

「控えめという言葉を考えて人に土下座してこい。ともあれボケとらんわ！」

「ご老体、ボケた人間は皆そう言うんだ。狂人が自分の事をまともだと思っているようにな」

「それおぬしにもブーメランするぞ？ ともあれわしの話を最後まで聞けい。話はそれからじゃ」

「良いだろう、話を聞こう」

「ホント偉そうじゃのう。怒りや呆れを通り越して感心してきたわい。まあともかく説明を始めようかの。」

……ここは死後の世界じゃ。それで儂は神じゃ。

「ああ、突っ込みは後にせい。今は儂のたーんじゃ。」

「なに？ 慣れない横文字は使うな？ いいじゃる別に、儂の勝手じゃ。」

「ともあれ話を戻すぞ。」

「まず大前提として、おぬしは死んだ。トラックにはねられての。覚えておらんか？」

「夢ではないぞ、すべて本当にあつた事じゃ。全身を強く打つてほぼ即死じゃ。その時の様子を見てみるか？ かなりむごいぞ？」

「……まあそのほうがよからう。あまり見たいものでもないしな。」

「……ああ、あの子どもなら無事じゃよ。投げられたときに尻を打ったぐらいでの。」

「……まあ目の前で人がはねられたのを見てしまって、少々精神的に参っているようじゃがの。」

「……まあ、今のカウンセリング技術はなかなかのものじゃからの、何とかなるじゃろう。」

「……まあその子の話は置いてじゃ、今はおぬしの話じゃ。」

「本来の運命なら、あの子どもはあの場でトラックにはねられ、

死んでおるはずじゃった。

「……そう、じゃが生きておる。運命が変わってしまったのじや。おぬしの影響での。」

「……ああ、別に怒っておるわけではない、驚いてはいたがの。」

「本来運命は人間にはそうそう変えられぬものなのじゃ。たとえ命を懸けたとしてもの。」

「これは絶対の法則じゃった。……おぬしの事例を除いての。」

「確かに運命は不変のものではない。」

「じゃが、もし運命を変えようとすれば、とても大きなエネルギーが必要となる。」

「そのエネルギーは人間一人の命程度ではとても賄いきれるものではない。」

「極々まれに大きなエネルギーの魂を持って生まれる者もある。」

「歴史に名を残す英雄たちじゃの。」

「運命を変えるならば、そのようなある種の先天的な能力を持つ者が、多くの人々を率い、立ち向かってゆく必要がある。そこまでしてやっと可能性が見えてくる程度じゃがの。」

「無論おぬしにはそんな才能はない。確かじゃ。何度も調べたからの。」

「もともとそうポンポン出てくるような能力ではないからのう。次に出てくるのは何十年、何百年先じゃろうかの。」

「じゃがおぬしは、その法則を覆しおった。」

「死ぬはずじゃった命を、自分の命一つですくいおった。」

「これは英雄でもなかなかできることではない。それほどの」とじゃ。

「それ故に、僕はおぬしにとっても興味を持った。」

「じゃからの、おぬし、……転生してみんか？」

「転生？」

「そうじゃ、転生、生まれ変わりともいうかの」

いきなりあらわれて変なことを言い続けた爺さん（自称神）が、さらにわけのわからんことを言い出した。

「なんでそんなことをしなければならぬ？ さっさと天国なり地獄なりに送ればいいだろう？」

「まあそれでもいいんじやが、おぬしのような存在に前例がなく、の、下手に運ぶと何が起こるかかわからんのじやよ。それに個人的におぬしに興味を持っておる者もおつての、まあ僕はその一人じ

やが。

ともあれ、何が起るかわからんのなら、もっと観察しようということになっての、じゃからおぬしをどこか別の世界へ転生という形で送り込もうと思ったんじゃないか」

「……突拍子がなさ過ぎて訳が分からないが、まあご老体の言いたいことは分かった。要するに私という存在が世界にどのような影響を与えるのか実験してみよう、ということか」

「うむ、そんな感じじゃ」

「……ところで、ここは私たちの世界で言うあの世、というもののだね？ それにしてはらしくないな。どう見ても少し殺風景な和室でしかない」

「ふむ、もともとこの場所には決まった形というものが無いのでな、とりあえずおぬしが落ち着きそうな形にしてみたのじゃが、違和感があるならもっとわかりやすくしようかの？ ……ほれ！」

そついいながら爺さんがいきなり手をたたいた。

するといきなり座っていた畳が水に浮かぶ大きな蓮の葉になり、辺りは見渡す限りの蓮の花だらけになり、空には天女が天使と踊っており、少し離れた蓮の葉の上ではキリストと釈迦らしき人物が朗らかに談笑していて、そこに天照大御神らしき女性も加わりさらにぎやかになっていった。

「……いろいろ突っ込みどころはあるが、とりあえず混ざりすぎだ。とりあえずさっきの場所に戻してくれ。こんな混沌とした場所では落ち着けない」

「そうかの、あいわかった。では」

また爺さんが手をたたくと、周囲の風景は先ほどの和室に戻った。

「さて、これで儂が神だと信じてもらえたかの？」

「……なぜ私が疑っているの？」

「そんなもん、おぬしの心を読んだからに決まっておろくに。」

「……なるほど。確かに今ので疑いはだいぶ薄まった。あなたを神だと認めてもいい」

「ほっ、そうかの。それはよかった」

「それで、私はこれから何をすればいい？」

「転生してくれるのかの？」

「別にかまわない。なかなかできん体験ではあるからな」

「そうか、ありがたいの。では、今回の実験について話して行く  
「そうかの」



## プロローグ 3 (前書き)

プロローグ 最後です。

では、さようなら。

### プロローグ 3

「ではとりあえず、転生するに当たりいくつか説明することと決めておくことがある。

まず一つ、転生先はおぬしの世界にあつたある物語の世界をベースにした世界になること。

二つ目に、その世界では何をやってもよいものとする。基本的に今回の話はおぬしが世界にどのような影響を及ぼすか確かめるためのものじゃからの。たとえ本来の物語から大きく外れてもいのように世界を作ったので、世界そのものを壊さない限り、何をしてもおーけーじゃ。

三つ目に、今回の実験に期間はない。おぬしには不老不死に傷の自動修復機能も付けられることになる。じゃから好きなだけ新しい世界を楽しんできて良いぞ。本来おぬしにはする必要のない事をさせているわけじゃしの。これくらいはさーびすじゃ。やめたくなつたらそう願えばいい。そうすれば実験は終了し、おぬしを普通の魂と同じように扱うことを約束しよう。

四つ目に、これから行く世界には、今までの体と名前は持つては行けぬのでな。新しい姿と名前を決めてもらいたいんじゃ。

そしてこれが最後じゃが、おぬしには転生するに当たり、願いを三つかなえてもらえる権利を持つ。新しい世界に備えるため、いろいろ必要なものをそろえるためのものじゃ。よく考えて決めなさい。

さて、説明はざっとこんなもんじゃが、何か質問はあるかの？」

「私が行くことになる世界とは何の物語をベースにしているんだ？」

「まあ、儂らも何でもよかつたのでな、とりあえずおぬしが生前読んでおつたものの中から適当に選んでおいたぞ。えーと、……魔法先生ネギまという物語をベースにした世界じゃ」

「ほう、あの物語かね。それはまた興味深い……。では次の質問だ。三つ願いをかなえろといったが、どんな願いでもいいのか？」

「ああ、構わんぞ。さすがに『転生したくない』とか、『自分も神にしる』とか結うのは無理じゃがな。きちんと転生してくれるなら、たいていの願いは叶えてやれるぞ」

「……転生と言うと、新しい命として赤ん坊からやり直すことになるのかね？」

「いや、その世界にいきなりあらわれた、という形を取ってもらおう。おぬしはその世界の構成物ではなく、あくまでいれぎゅうとして動いてもらうことになるからの、おぬしの意図に反したつなかりは極力避けねばらんのじゃ」

「……なるほど。では転生する時間と場所は指定できるのか？」

「できる。その指定がなければ原作開始時に放り出すつもりじやったからの。希望があるなら叶えよう。無論原作より未来、というのは遠慮してほしいが。ああ、この指定は三つの願いとは別に扱われるからの、願いの数が減ることはないから安心せい」

「……ふむ。大体分かった。質問はそのくらいだ」

「そうか。では早速、準備に入ろうかの。ではまず姿の設定

じゃ。なりたい姿を想像せい」

「わかった。……………こんな感じでどうだ？」

「ふむ、これでよいのか？ では変えるぞ」

神がそういった瞬間、私の体は大きく揺れた。

だがその揺れもすぐに終わり、その時にはもう私は私ではなくなっていた。

神はどこからか出てきた姿見をこちらに向け、

「どうじゃ？ 希望通りになっておるか？」

そこに映るのは、背丈は大学生ほど、サイドに白髪の一筋入ったオールバックの鋭い視線を持つ顔だった。

「うむ。想像通りだ。素晴らしい」

「ほっほっほ、それはよかった。では次に、名前を決めてもらおうかの。その姿で、おぬしはなんとなる？」

「ふむ、ではこの姿の持ち主から名前も頂こうか。いいゲン担ぎになるだろう。私はこれから、『ミコト』と名乗ることにする。苗字はないほうが楽だし、漢字は理解できない者もいるだろうからな。カタカナ三文字で『ミコト』だ」

「……………よし。登録完了じゃ。ではミコトよ、願いを三つ言うがよい」

「まず一つ、私の気と魔力を、これから行く世界においての最高

クラスにしてほしい」

「ほっほっほ、構わんよ。その願い、聞き届けよう。」

「二つ目は、私に、能力を作る能力を与えてくれ」

「ほっ！ ずいぶんちーとな能力じゃのう。何でもできてしま  
うではないか。……まあ良い、その願い、聞き届けよう。」

「では最後に、……私が今までいた世界において、私の存在のみ  
を消してくれ」

「ほ……？ どういうことじゃ？」

「私が死んだことで悲しむものや困るものがあるのは忍びない。  
私がしてきたことの結果だけは残し、私の存在を完璧に消してく  
れ。それができなければ、あの世界にいる誰かにかたがわりして  
もらってもいい。とにかく私の存在をなかったことにしてくれ」

「……本当にいいかの？ 辛くはないか？」

「私はあの世界ではもう死んでいる。今更戻れないなら、いな  
かったことにしたほうがあの世界の私の関係者はこちらん、私自身  
も気が楽だ。彼らの悲しむ顔を想像しなくてもよくなるのだから  
ね」

「……そうか、わかった。その願い、聞き届けよう。」

「……では最後に、行きたい場所と時間を指定しなさい」

「場所は誰も入ってこれない森の奥深く。時間は原作開始の七

百年前で頼む。不老不死ならば、百年位はゆっくり修行して、力をつけてからゆっくり世界を回るのもいいだろう」

「そうか、わかった。おぬしの希望を聞き届けよう。ついでに向こうでできるローブもくれてやるう。おぬしが想像した姿はスーツを着ておったが、おぬしが希望していた時代にスーツはないから。」

……さて、これで前準備は終了じゃ。あとはもう、新たな世界へ旅立っただけじゃ。何か聞きたいことは有るかの？」

「……いや、もうない。これで十分だ」

「そうか。では……。フン!!!」

神はいきなり、足元の畳を平手でたたく。

すると、あんなにぴっちりまっていた畳が一枚起き上がりその下を見せる。

そこを覗き込んでみると、ちょうど畳一畳分の穴が開いており、下に降りるための階段が暗闇の奥底まで続いているのが見えた。

「ここをずっと降りていけば、おぬしが希望した誰も人が寄り付かぬ森に出られるぞ。中は暗いからな、これを持って行け」

神はそういって、松明を手渡してきた。

「ああ、わかった。何から何まで世話になったな、神よ」

「結局おぬしは最初から最後までそのしゃべり方か。少しは儂を尊敬したらどうじゃ？」

「何を言う。尊敬しているとも。私のわがままをすべて聞いてくれた者だぞ、尊敬しないはずがないではないか。私はそれが表に出づらいただよ」

「左様か。……まあ、気を付けてな」

「ああ。次に合うのは私が生きるのに飽きた時になるのか。では、もう二度とあなたに合わないことを祈ろう、ご老体」

「ああ、せいぜい楽しんでくるとよい」

「では、さらばだ、おせっかい焼きの神よ」

「二度と来るな、意地っ張りの不思議人間」

そういつて笑った神を見て、私は階段を下りて行った。

これからの世界が楽しいものであることを期待しながら……。

### プロローグ 3 (後書き)

主人公の容姿は、終わりのクロニクルの佐山御言がローブを着ている姿を想像してください。

さて、始めりました創造王の遊び場。

今作は、私の初連載作品でありながら、構想を全く練っていない行き当たりばったりもいいところな作品です。

そのところも温かい目で見ながら、なかなか出てこない続きを待っていてくださいませ。

次の話は、主人公が神からもらったチート能力を確かめたりする話の予定です。

いろいろ甘いところなどあると思いますので、誤字脱字感想など、ガンガン寄せていただければ幸いです。

それでは今日はこのあたりでお別れです。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。



## 第一話（前書き）

頑張りました。

小説情報を見てみたら、お気に入りかもう三件も。

しかも感想までいただいていたしまいました。

これはもう頑張るしかありませんね！

それではこの場をお借りして、感想を頂いた竜華零様へお礼の言葉を。

大変丁寧な感想をありがとうございます。

その言葉だけで頑張ってくださいませ。

そして、このような返事の仕方です。申し訳ありません。

さてそれでは、創造王の遊び場 第一話、始まります。

## 第一話

気がついたら森の中に立っていた。

神に言われた通り、先程まで暗い下り階段を松明を頼りに下りていたが、10分ほど下り続けると明かりが見えてきた。

光り輝く出口を抜けると眩しさに目が眩み、目が慣れてみると周りには見渡す限りの緑が広がっており、生い茂っている樹木のせいで空もろくに見えない。まさに樹海とも言える場所だった。

背後を見ても、階段どころか出入り口もない。

階段を抜けるとそこは森だった、か。ふむ、私に文学の才能はなさそうだな。

苦笑しながらあたりを観察するも、神が願いを叶えてくれたのだろう、人の気配はない。

さて、転生というものをしてはみたものの、これからどうしたものか。……もらった能力の訓練をするにしても、ひとまず拠点を探さねばならんかな。さしあたり木の洞や洞窟等が定番か。

そんなことを考えながら適当な方向へ歩きだす。

しばらく歩くと少し開けた場所が見えた。大きな木が倒れているところを見るに、どうやら大木が寿命を迎えて倒れてしまい、ぽっ

かりとできた隙間のようだ。

やっと空をまともに見ることができ、なぜか安心してくる。

転生なんて経験をして、太陽の下に生きる生物は日の光からは縁が切れないのか。

そんなことを考えながら見上げた空には雲一つなく、そんな空模様も相まって、なんだか柄にもないことを考えていた自分が可笑しくなってくる。

もらった能力を確かめるためにも集中できる場所が必要だ。

こんな深い森だ、人が来る心配はないだろうが、猛獣の一匹や二匹いてもおかしくない。何か来ても入り口をふさいで籠城できる洞窟か、敵を早く見つけられる小高い丘、あるいは開けた場所が適している。ここなら広さも十分だね。とりあえずここを暫定的な訓練所としようか。

大きな切り株を中心にした空間は、地中に潜る根のせいかとどこどころデコボコはあるが、それさえ気にしなければ天然の芝生の生えた広場だ。

中心まで歩いていき、ロープを脱いだミコトは、自分の体を確かめる。

「スーツ姿か。確かにこの姿にはあっているが、この時代には前衛的すぎるな。何かこの時代に合った服を考えなくては」

スーツがある程度着られるようになるのは18世紀辺りからのはずなので、指定した年代に送られたのなら今は14世紀。場違い

もいところだ。

「かといってロープ姿でも怪しいな。人前に出るためにも何とかしなければな。」

まあそれはおいおい考えるところ。まずは今できる事の確認と行こう。あのおせっかい焼きのことだ、おそらくは……、あった」

歩いている途中から気になっていたロープについている内ポケットの違和感。落ち着いた場所につくまで見ないで置いたそれを確かめると、封筒入りの手紙があった。開けてみるとそこには、

『この手紙を見ているということは、僕はもうおぬしの前にはいないのじゃろっ』

「……あなたがこの世界に送り出したんだから当然だろうが。何で自分が死んでいるような文面なんだ……？」

『とまあ冗談はさておき、この手紙にはおぬしの現状と能力の使い方を書いてある。』

よく読んで覚えておくように。テストに出るぞ！』

「何のテストだいたい。全くなんでこんな無駄な文章を……」

『まあ、人生には多少の遊び心も必要じゃて』

本当に破り捨てたくなってきた。だがまあ情報収集は大事なことで読み進めていくと一枚目はほとんどがふざけた内容で、大事なことはあまり書いていなかった。便せん三枚の内一枚を無駄にした神は滅べばいい。紙様の怒りを知れ！

ともあれ二枚目に取り掛かることにする。

『これ以上ふざけるのはさすがにまずいので、本題に入ろうかの』  
だつたら最初からふざけず真面目にやれ。

『さつそく能力の使い方じゃが、魔力と気の方はこの世界の者に聞いて修行したほうが良いじゃろう。言葉で説明しても体で覚えなければ意味がないからのう』

「まあ、それはもとよりそのつもりだが。この場合は知識よりも経験の方が大事だからな。まあ百年も研鑽をつめば何とかなるだろう」

『それに関連して肉体のことじゃが、不老不死になっておる。  
今の姿は大体18歳ぐらいじゃが、それ以上年を取ることはない。  
永遠の思春期じゃな』

うるさい黙れ。

『また、それに伴い、どんな怪我でも一瞬で元に戻るようになっている。この蘇生に魔力、気は必要ない。儂からのさーびすじや。おまけに戻るのは怪我をした一瞬前の状態にじゃから、それまでの訓練の成果が消えることはない。まあ治癒能力のすごいものと考えてくれればよい』

「魔力と気が消費されないのは助かるな。いざという時に回復できなくては意味がない」

『また、気と魔力じゃが、今のままでも最強クラスじゃ。じゃが、訓練次第でさらに上げること可能じゃ。特に上限は設けておらんから、好きなだけ強くなるとよいじゃろう』

「上限なしか、鍛えがいがあるな。これは楽しみだ」

『そして最後に、おぬしの希望した【能力を作る能力】の使い方じゃが、こんな能力を作りたいと考えるだけでよい。その通りの能力を習得できる。作れる数に限界などないので、好きなだけ作るがよい』

「なんだ、ずいぶん簡単だな」

『じゃが、そのように作った能力は、あくまで思い浮かべたことだけしかできん。切り傷を治す能力ならやけどにはきかんし、速く走る能力なら速く泳ぐことはできん。まあ水の上ぐらいなら走れるかもしれんが』

「きちんと細部まで設定しないと不完全なものが出来上がるのか。これに関しては繰り返しやっていくしかないか」

『あと、この能力に関しては制限をかけさせてもらった。制限の内容は、【死者の蘇生と対象の単純な無敵化は行えない】というものじゃ。あまりにも強すぎるからう。じゃからいろいろな能力を使って無敵に近付くのは可能じゃ。まあ能力の説明はこんなところじゃな』

「まあもともと死者の蘇生はするつもりもなかったが……、無敵化はできるのか。いろいろ試行錯誤が必要だな」

そこで二枚目が終わっていたので、三枚目を見る前に、さっそく能力を使ってみることにした。

「一番最初に作るべきは索敵能力だろうな。いくら強力な能力を作っても、使う前に攻撃されたら終わりだしな」

そう考えて能力作成を始める。

「対象は人間と大型の動物全般。半径500メートル以内の対象すべてと半径5キロメートル以内の害意を持つ者を察知する能力。……ああ、あと半径100メートル以内の武器とその一部、さらに魔法や気弾、トラップにも反応するように……っと。こんなところでもいいだろうか」

こうしておけば大体の危険には反応できる。武器と一部の対象にしたから狙撃用の弾丸にも反応できる。回避方法も後々必要になるだろうが、

「ひとまずテストしてみるか」

作ったばかりの能力を発動すると、神は本当に丁寧に願いをかなえてくれたらしく、範囲内には人間は一人もいなかった。その代り……

「なんだ……？ この大きな反応は？」

大きな、おそらく動物の反応がここから400メートルほどのところにある。

体長がかなりでかい。

でかいといってもゾウ程度ではない。その数倍の大きさの生物が、こちらにだんだん向かってくる。

「この地球上にゾウより大きな陸上生物は存在しないはずだが……いきなり不具合かね？」

だが、何度調節しても結果は変わらず、それどころかどんどん近付いてくる。

しかもなんだか空気が揺れている気がする。

まるで何か大きなモノがこちらに飛んできているように。

「そういえば、まだ手紙には続きがあったね」

現実逃避気味に手紙の三枚目を見ると、

『最後におぬしの現状を教えておこう。実は「誰も入ってこれない森の奥深く」という条件をくりあする場所が地球上になくてのう』

なんだかとても不吉なことが書いてある気がする。

『じゃからおぬしを魔法世界の森の中へ送り込むことにしたんじや。地球とは違って大型の危険生物がたくさんおるからの、注意するんじやぞ』

……魔法世界？ 大型の危険生物？ ……まさか

『でもまあ、げーむ好きにはたまらんじやろうの、なんせ本物に



遭遇できるからの』

……本物？ 何の？

その答えを読むのと同時に、広場全体に影が差した。

ちょうど大きな反応も自分のこの広場の上空にある。そしてそのまま、

《ズシン！！》

という音と共に地面が揺れる。

その原因を見たと同時に、先ほど読んだばかりの言葉がよみがえる。

『おぬし、ドラゴンは好きかの？』

そして私は足が速くなる能力を急いで作り、ふざけたことをしてくれた神を呪いながら、ロープをつかみ走り出す。

後ろに体長15メートルほどの翼付きの巨大なトカゲを伴って。

結局この日は逃走劇に終始した。

## 第一話（後書き）

今回は新世界に到着したミコトの様子とスペックの説明、そして初めて的能力使用と受難を、神様（紙様？）との漫才を挟みつつお送りしました。

次回はさらなる能力な開発と、それを有効に使ってみよう！ というお話……のはずです。

ある程度の話のアイデアは頭の中にあるので、学業の合間を縫って執筆、投稿したいと思います。

いろいろと変なところがあると思いますので感想で指摘していただければ幸いです。

それでは今日はこのあたりでお別れです。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1988z/>

---

創造王の遊び場

2011年12月9日00時59分発行